

## 論文要旨

東京藝術大学大学院美術研究科  
文化財保存学専攻 保存修復研究領域  
1320925 李 艶峰

### 20 世紀前半期における中国人留学生の油画技法と表現に関する研究

—東京藝術大学所蔵の《自画像》を中心として—

#### 【研究の目的】

20 世紀の初めから、日本の近代美術はいち早く中国に影響を及ぼし、美術学校における油画教育の導入などによって、旧来の伝統的な中国の教育制度に革新を促した。近代における日中の美術交流は中国人の日本留学から始まったが、近代史における両国関係の複雑化によって、実証的な研究が行われているとは言い難いのが現状である。

本研究で取り上げる東京藝術大学所蔵の留学生たちの《自画像》は、この時期の数少ない重要な作品であり史料でもある。そこで、20 世紀前半期の油画及び油画教育における日中両国絵画の関連性という視点で、中国人留学生作品を対象とした調査を行うことによって、中国の油画が日本の油画からどのような表現技法を受け入れたのかを検証する。さらに、欧米からの直接の導入ではなく、日本を経由した油画導入が近代の中国美術、ひいては今日の中国美術に与えた影響についても考察する。

#### 【研究仮説】

本研究では、日中両国の社会的な変化に照らして、中国人の留学時期である 1905 年～1945 年の間を、第一期：1905 年入学～1912 年入学、第二期：1912 年入学～1931 年卒業、第三期：1932 年卒業～1945 年入学と区分する研究仮説を提示した。

**第一期**の留学生は、清朝の洋務運動を背景にした留学生である。辛亥革命（1911 年）によって清朝から中華民国に転換したことに伴い、留学奨励制度も変化したことに留意した区分である。

**第二期**の留学生は、中華民国からの留学生であり、1912 年から 1930 年前後までは人数が順調に増えている。この時期は、良好な日中関係のもとで様々な日中交流が行われた両国の蜜月期とも言える。

**第三期**の留学生は、第一次上海事変（1932 年）等で顕在化した日中関係が悪化に伴い、留学生数が減少に転じ、退学者や除籍・除名が増える中での卒業生である。そして、1945 年の終戦後、日中両国の国交は断絶状態となり、留学生も不在となる。

#### 【論文の構成】

第一章では、日本における近代美術の受容を巡って、油画の受容、東京美術学校における西洋画科の設置、油画教育の展開などについて、先行研究をもとに基本情報を確認した。

第二章では、まず中国の社会史と美術史に焦点を当て、美術留学生の登場と日中両国の制度との関連性を明らかにした。また、東京美術学校における留学生と作品に関する情報を把握した。その上で、東京藝術大学所蔵の《自画像》群の資料的な価値を明らかにした。

第三章では、研究対象作品の具体的な調査を通して、研究仮説の証明を試みた。中国人留学生の《自画像》における光の選択や技術などを調査して、技法や表現の変化の傾向を読み取った。作品個々に対する目視熟覧と光学調査の結果については第二節にまとめ、第三節において研究仮説からの見解を述べた。

終章では、中国人留学生の油画技法の変遷と日本の近代美術が中国美術に与えた影響についてまとめ

た。最後に、中国人留学生の《自画像》を取り上げた本研究を通して確認できた日中文化交流の意義を提唱した。

補章では、「留学生の帰国後の活動（～1937年）」「日本留学人事から欧州留学人事への転換（1937年～1945年）」「民国から共和国への転換における人事の継続と変化（1945年～1949年）」「共和国時代の油画変遷の概要（1949年～）」「現在の中国の油画の状況」という4つの節を設け、中国人留学生全体を通して、中国油画、油画教育、近代美術にどのような影響をもたらしたのかについて考察した。

## 【結論】

本研究では、東京藝術大学が所蔵する中国人留学生を第一期(1905年入学～1911年入学)、第二期(1912年入学～1931年卒業)、第三期(1932年卒業～1945年入学)という三期に分け、その時期に該当する日中学生の《自画像》を対象に熟覧調査と光学的調査を行った。その結果、三期を通して、日中学生に顕著な技法上の相違は認められなかったが、第一期においては東京美術学校における「新派」の表現を受容した状況、第二期においては大正期の新しい美術の潮流を日本人学生とともに受容した状況が伺えた。しかし、日中関係が悪化した第三期においては中国人留学生の卒業率の低下があり、卒業した留学生たちの《自画像》も総じて重たい雰囲気になっていることがわかった。

こうした変化から読み取るべきことは、絵画が社会情勢を敏感に反映し、それを後世に伝えるものになっているということである。ただし、筆者は、第三期を不幸な時代として評価するのではなく、日中文化交流が開花し、日中の学生たちがともに新しい表現を求めていった第二期の重要性を相対化するものとして位置付けたい。

東京藝術大学が所蔵する中国人留学生の《自画像》群は、過去における日中両国の歩みを語るだけでなく、これからの日中両国の関係構築に示唆を与えてくれる作品群でもある。